發句合詠艸

へ 5
2219

蘭谷發句集　甚也

2.219

御点
當季五題
發句合詠艸

弥生上浣

催主
蘭谷

明治四十五年四月廿四日
藤野漸氏寄贈

五〇一一一〇

藤野潔氏遺愛之記

海棠

海棠や花にも骨のある程　波鷗

うらゝかや野紅や當と木の芽哉　泉魚

海たうやりりし桃にも桜より　櫻澗

かいたうや眠気誘ふ楽の音　松風

楊君のさゝひな衣裳や海棠花　谷川

海棠や笑顔もこそるゝ花の色　東園

五 海棠や花に照りそふ夕日影　蘭谷

○ ぐんなりや眠るはまたも起もせし　銀蟾

○ 海棠や膳まで入日清漂　馬谷

二 うなだれし色子わかるゝ笑顔かな　心水

一 海棠も雨や濃れし利休にほひ　醉墨

一 かしこしや色を見る唐机　躍鱗

二 海棠やまたかゝる四五日置来し　墨鳥

五 海棠や梯でも簾揚立姿　竹園

五 うつむきし花や硯の海にさし　松亭

二 海棠や粧ふはしき雲の雨　一瓜

燕

○ 新家に手にかゝる雲に　波鷗

五 訓条にきゝ門へ入るや燕かな　泉魚

○ 西に桐乃夕日動きて乙鳥かな　桜洞

○ 杣人の家うとし菓子に燕かな　松風

二 山乃端入日の折やむら燕　谷川

○ 矢のあし堂竹桜家ある燕かな　東園

十 学寮に折々聴る清き燕かな　蘭谷

一 新も乃家ある手燕かうむら燕　銀蟾

一 普請する門や乙鳥の柳かな　馬谷

一 若葉の奉家稲川ちかる燕　心水

一 立後乃中より甲斐し夕燕　酔墨

五 酒のみ霞乃うちらむらし乙鳥　蹋蘚

五 燕や芦の葉に尾屋の七屋門　墨鶯

○ つくらでや七乃雪に立屋根　竹園

一 こゝろなき根とみえ燕永の雨　松亭

一 藁やに酒の家も通り桜　一帆

櫻

〇　岩角に休み掛けや山さくら　波路

二　櫻狩浮れし子も花の里　泉魚

一　鐘撞も心つくしや庵さくら　櫻澗

〇　深山への見えても居れに櫻哉　松風

一　山寺乃鐘撞かぬ日もさくら哉　谷川

二　七日目と晴れし雨の山櫻　東園

九　斧持ちし人もまよふ山さくら　蘭谷

一　降り積る雪かと見えて櫻かな　銀蟾

一　盛なりて一日の残る雲かな　馬谷

一　深山の花の静かし山さくら　心の乃

九　八重一重る眺め飽きのさくらかな　醉墨

一　晩鐘もきこえて暮るゝ山ざくら　躑躅

○九二一○

枝葉らいたくかし夕桜　墨烏

茶の水乃逆の幕ゆるさらう　竹圃

入相は桜も雨や降らんら　梅亭

深山木の懐廣し山のうちら　一瓜

雛

雛棚や桜は程ふ大淀張る　波鷗

○九○○一五○

雛乃ゆきは葉上にも雛乃棚　泉奥

硝子ゆ瑠璃の色也雛祭り　桜洞

花も月も立ならびし雛の内裏　松風

うつくしく挑灯の影や大張子　谷川

調雛や袖かうしぬ新土人　東圃

鄙人のこと桜は在也ひとゆくなる　蘭谷

達ても咲も聲ゆる色也雛祭　銀蟾

○ 江の柳や華ちりし荒宮方　馬谷

○ 鯰柳や橘ならぬ恵かな　心水

一 そよ柳やうち添もしほに暮春　酔墨

一 山海坂下段積や鯰の柳　躍鱗

一 御山かなや是とこそ数ならぬ都人　墨鳥

○ 華橘こゝ男の業や此布海川　竹園

一 織の女ちて草橋こゆる鯰祭り　松亭

一 鯰柳や日近さに影合海宮　一風

欵冬

一 欵冬や花散る山に根橋緑　波鷗

二 やまぶきや魚の濁りあるも影　泉魚

○ 棣棠や雪にかゝりし夜の窓　桜洞

一 やまぶきや山ふき咲てまちて人　松風

一 鶯や岩屋の道とせし家の里　谷川

五 山吹や岸より外に流れし　東園

二 やまぶきや猶小川に二夕わかりて　蘭谷

一 宿帰るや宇治の茶色も水に寄　銀燈

一 棣棠や隣の庵り夕煙　馬谷

一 山吹や葉を汲む水も花に影　心水

〇 鶯や咲らぬてより谷渡し　酔墨

五 やまぶきや井手の流れて細流　躍鯉

〇 鶯や身をそよし向ひとの　墨島

一 山吹や曲りの捜書枝乃中　竹園

五 棣棠や乾菜にかゝる淀む波　松亭

一 山吹や足をとゞむる家の数　一風

天 蘭谷

地 松亭

人 躍鱗

下畧

四季
發句

四十點

蘭谷

下界

人 羅緯

天 蘭谷

此 洙真

春

梅

三　下結負しく渡るを成り梅の花　三

燕

一　去鳥やはなしの別れる新縁まで　九

天花菜

一　午海め千物出るを天能漬しれ　十五

櫻

三 桃よりは葉屋乃酒ゐる川櫻 二十一

小鮎

四 散花をと舟に波逃る小鮎哉 廿七

夏

五月雨

三 五月雨や常陸も日の暮かゝり 三十二

鵜舟

一 月今夜川瀬に燃る鵜舟哉 三十八

閑呼鳥

二 寐ることを一里塚にかんこ鳥 四十四

短夜

一 短夜や戸にぬらぬ小鷄の聲 五十

毬栗

三　いまさらに年折てし散るも奈子のを　五十六

秋

紅葉

二　深て行秋乃間見ゆ露のもみち葉　六十二

野分

三　雨もあとは夢にてよ見る跡のは　六十八

鹿

一　谷川の水波も里や鹿の声　七十四

秋雨

三　夕か月は松苔も紙袖し縮れぬ雨　八十

虫

二　錦木の千束に鳴くや虫の声　八十六

冬

枇杷

一 人ことも行山里や枇杷の花 九十二

小春

一 鶯もさそはれ出しける小春哉 九十八

麦蒔

一 麦蒔や鳥やら中に鶴の声 百四

落葉

一 夕鳥飛さけて流るゝ落葉かな 百十

霜夜

三 瀧の音付耳に苦殺や打寝哉 百十六

揚所壽稼一面覚

宮のとし

二仕

常念

初午や糸に練入種おろし
上
政柳

寝を合て寝の　一交
春は花の下戸を珠文うて糸に
多氣に粉は炒焼を摘ま吹て飛
便舟と志ぐらく石に腰掛けて
玉を汗の名は笠は　神に年
残しけむ月の光りも秋の気
芽かしくも生てて秀の色

護なれハこそ帆下ろしも清見か関
維ふも非なぬし みかせ
恩にを積なくなけるやらしせ
か夕へ済して仕只ふ餅菓子
ゆうて経入院の和尚梅やかし
戊年振りて松の大木
古日待ち一首読との歩[redacted]し
読

あそいらへる漸しれ白波
あまひな紀身小照る月乃従たから
塩浪む健挿乎西行のこかるゝし
文解れ常紀挿故山ふる秋の風
意の礼ひを掛けし代秋
花を折れかきれと新しく発り
むきしても楪れ孫の郭し

當蔵の日し縮ま（ナカメ）　去芳して
笑止千人へ　出るま　さらづれ
山をまま勝ちて不動を詣ますき
杖ひし時を搗り　かぶれ風
涼風のれしと肩　えさいまく
汚俯すぬらしひ如刃こい
衣愛の悪ろ修るし瞎と花

海こゑふ小蓑結　待ゐ花
むうゝと走つとも詢ゝ花
仲人めき
保達れよおしとつんせし縫ひ袖
てらくと元行燒牝　夜の雨
葉の杉と炒ひ　袖振
秋の月隠まし山まま　秋れ尽
萩の鋪ゝ　河尻の如

蒼織の日し縮ま　未なして

笑上手へ　出るま　さらづれ

山おもまは勝つて不動を嵩まるし

杖ついし時を橋り　かぶきもの

涼風のわしいと肩　えいいき

河御ほめかしいひのみ力

夜盛の声る作るも暁と来ん

寺北好ふ小萱結　法名に

仲人はうそをまつと論ら名

保度ま多しをうんせし縫袖

てらゝと九引枕北あさけのよ

茶の数とかへひ神様

秋の月隠まし山ま　わわれま

芦秋の浦は　江戸北の地

出守は案内てんそを労哉
御さい游より見れ母は我他
妻野は館に田むかし聞へくて
川年服か娘と尼観寺霧数
山田服の精議れて　猿のこゑ
人音まさるころしれ尼侍
檍櫛すむりし志れぬ　業太志侍

平家の母は津にたてあ
精ること学轉月の霧
須れぬ楓は影小楓衣
新陽と跡袖利のころと
あら笑や人まよ守
若乾をとえり深重と一星地
東風聞寝て幸流やら
けふと云風　南　世る湯雅

平家の墨につれ叶中

さて後も常に何の理しかつ
加茂川と夜と踊に入れぬ
夕立に乗馬に居るを西風とか
いくくと田くと云ひ連歌
先相手に沙汰の終のかうべき
消もやされこけ安き
合掌に付と洗しけり
一むかしの[illegible]桜花
卯月と衣に[illegible]桜花

槙[illegible]
せるのれを踊り 云ふ事に捨る云ふ
けゐと志しゝ咲れ 美[illegible]

茶翁發句集

一　四季混雑

一木拾八の脊句又詩へ気ゟり梅の丹
小男鹿も数ゟく混や谷の走
数年も祢くも数ゟれて大役の乡
謡子をしれて来ゟ年ゟり
扣扇をせしと指人や康の乡
殺気も中障子几の鶴の乡
秋草の人来て茸ゟり康の乡
玉味噌の根所白し康の急

鳴明を扱ハ狩ゝ左棟り扉の夕
莘ぬしで橋ハ浮て行弱し氷
峠まおつり尾花の陰や蕨し水
瑞り声きと立る名時り七日の月
葉林もゝしゆるて其るや扉の夕
扱おし撲や果て下むし　月石
笹舟のは焼や汁沿も雲の海
礼もいの絵かく代る桜り花
八百へこゝろれ扇く鳴事の花

夕月や先よ兀尤りてゝ乏りし山
春[illegible]つゝく青や紙子の芸を始
尾上から蕨るや鴨の小雨あし
古塚の荷ときれ出てる梢也代
汁残も松ハ花盛よりれ也代
飛鳥巻の賑りを叢は小路代
扱かゝの院よ熟ゝりれ也代
風かる破れ菊産や新井素
拍芝の汁よ鴨の賑りしう絵
麦苗ハ見雨とやしゝ色ゝり花

葉月は空もたゞのもや海の花
詠侘る稲をは花に埋て時雨
諸ぬる見て女郎花や初時雨
定まれど初冬は時雨(?)
立ちけり義仲寺か有女
名りや浮雲れ志は蓮れ池
六十之叟
葉の末破れ職の紙にて
居り年に我を梅さくて
風はまこともあまた一葉に
白妙は梅を弥やるや春の雪

踏も詠の葉蒔し春の雪
よみては折戸咲つゝ菊作り
志のゝみよ深山の菫や七夕絆川
おりゝの枝や梅のとろしも枝の緑
紛ふ人よ神楽人多みや朧月
是は紀れて親母の初も恥の声
煤掃や先とし神の三昔更
去年も職も(?)
梅の手に咲る思妻も(?)の月
行(?)

花野迄れともしもせすして露ぶり
あれ毎に九重や花を折し
吟けむ露ちらしてもわときし
海士のちとりてまことに
鶴も良しそて高ぬしてなし枕
文政十丁亥年六月朔日八十二才にて剃髪して
志らしけや衰もの々九情を
年七十七にして道流を達
悦の館にて
嫁しさや夜寝光の夜はか

柿や石に枝るまて千代の秋
七十九才にして
今日れ常人のよませて綿を重くり
稲年や我伝ふもの碑かて人の文
春をやゝ深山にこもりて雪解
初く水草に菴をとむる綿代
露に花もこころんま恋の川
草餅にまつ柿の春や紙は秋
青丹の露の宿りや萩の花
雉光も同市に伴る子飯の熊

一

鴫立や草のとさへ細流れ

咲こぼるゝ萩の影にや蟋蟀

高く掛や宵のさへ長閑

樵をるや日向へ出る竈と猫

文政元寅ノ年此年よしかりを

おさまる竈青きも猶く

八百万代とかへりあらし川の流り

梅の花むかし柳の糸長し

絲花や雅でもまた立のより

霞月やこゝろ乙丈出る志がらみ

八千代まで栄へよ松の若みどり

賑しく来しめんも此親子中

咲く見ても根は花飛ありも山桜

大節と中より咲ん迄しまおり

錦繍の今下せくれ雅なる若句

福ふ珠又菊は未永く栄ゆく

目出度敬寿れい

急ぎまわれ在語大事とききのも

悦しめでた数をり永し菊の花

上ゟ悉く凡か花乃漢錦て

こゝろや葎の庵も限のてら

七十九才にて

梅咲くや老の寝覚もおもしろし

我は嬉し廿日指くや年のくれ

君の御代御祝を探しまゐらせて

御室の角くも御代や呼の春

若水や汲ふ八十九年目

八十四才にて

去年も今年老たのし跡のむかし

大年の嬉しさて老衰や書の音

一入小松ひき立てさゝくり花

八十七才にて

振りかへ見る何もして初日影

八十三才にて

久見るあつて我内も九十九つ

若竹しや花はさかりぬ嵐山

去年の秋猶よりも悲を思ひけ

月見の夜奉りとむかしく

栄えけるはみなし猫寿

我か住所を

花見ての花やかしましいかり花

年内立春

梅か於まるゝハ未子なりとし廿日
湯花の第へを祝ふて
後継とハ見へさる梅のむかひ紀
春日九地ゝ葉へしや婚子松
右為于正月元日八十四歳にして
田字を祝ふ
五齢気の読たへかりけりのある
王年ノ卯月行松の虎拔へ移り
新宅を賀して 三句

一よせまて行よかるらん麦の月
新宅ま光を延して州ある
一物好よ一しほ涼し庭の松
冬か九や四條鯵もとかに着へ
東山の月を友同気に
一義経をいかに荒る洞りかな
戸年来強然方と京前に
のせて実千金まを見ししかい
今此けり乎家の賀
桜咲くにハ論婚とけり賀への祝

我家の古きも
君の御恵山よりも高く海よりと
深く難有事にて此米を悦の餘りに
君恩や深くして寿を二百歳
一 天保三壬辰年同巳癸巳年分
露霜も汗を流し於れしも
咲まぬせて茂りも深くして遠く
及ひ高野岡士を同高札貢代
京よて此度の事や宗古ゐ
既世代の志をし後代る伝也

花の香ハ施をあらはし梅の月
笑鳴や猿の空く折扇り
燈籠の川も晴き宿花葉摘
春さの夜や冬枯れの月より折露
秋年や業花をいろはの摂わら
志は後に家の老は少しく
古代やまと村を取りて行回を
道間へ佳石苔を取りお有る月
紙銭のうや二度美を深く萌り
永き世の姿や折る茂のも

川春や笑のたゝま花も吉き
草木とんの茂も破れても鶴代
水田の用に搗けりつきはなき
手唄も志りし清しうし杖にて
小娘の恋ふ文まてしえ家
梓作ゝと画ある御代の噂りきた
のほりまて高くや能ある茂の笑ふ
おりあゝや寛しの梓に陰年
一握ゝ（いかのほり）余りる深勢の長
草傍て川次梵かあや紙鳶いか

一 天保五甲午年歳旦春興
春の春待ぬまより初日の出
鴬や旭にゑるや去梅のゑてし
楪掛や千歳め御代の春なまり
　斎功
出る初や磯の海に寿の波
富士晴れて五段棚や三保の松
野鶴してさもりとこまて春の初
小松川根ニ若菜や若かゝし
縫ひはゐ露にも余りいて山家つき

童べは雪を見わけし若菜かな
春の平のなりし宗

思ひ出は難波の昔や梅の花
小笠原長武公の御祖母君
八十となり御年御賀を祝して

桜が咲る花と数へて七十路
の人は古今集を詠みて

春は花名見しや桜の花
下御徒なる七十歳の祝に
武人の杖掛る事を祝て身を寿りて

春毎の涼き恵みや福寿草
菜末年残年

花るわくや石臼の名より石臼の台
年の内立春

片尾は氷解してとしの内
南宝子去年秋弟子を
新光へ引移りしを春の頃
笑み振られ新花新館の梅咲き
しとしみとかしり後同られせん
孫は待りて

武士の新館の梅や早咲ん

こゝおしと梅笑へ寐ゝ三ゆの
川流り布袋の腹を世へ
うきしさのゆまりよ

春雨退やせ猫御と川流り
売と慶ヒ行りし西の前々文
来ぬ又蛙よ流らんふる川
八十九才の老らぬ

美花は百しまを流やし涼枝の豆
御礼物乃ちよの枝を満ちと花待ちて
愈りゝ満士も長寮く生れけり

沙羽白川 素蕎中 蒙にて
御候衣の沙川内より銭一文
捨以しましても一寸十八万物の
命と月の宿にて余りや
粗おせよ参去の室り年の暮
要旅泰寿院様分へ金一両菓子
沙蔵よし沙洲人おつりへ
一あすま移る猫を来るや芽の鞘
一沙蔵やれ会ともし祠の御桜
大雪や医師てくるも老の徳

お代や君にめでて寺小性
尋ねや古今の糸を引ふし
山とんこし林森の里やお月の月
人をとめても秋来る桜
父子ふたり結構に百位花をさす
二葉よりもひとふや立葵
引ちるや某立の花新流とめ

左右田川

思ひ子の弟や柳にゆふさかり
桜花の纏を是流れや散る身

小室御本の花とて

桜咲くもはらに陰や花見坂
引うきて千代おゝせの小松の根

追加

一 武州中延村長林山源蓮寺
八幡宮八そのかゝし八幡太郎
義家公之御寄本なるよし
日蓮大菩薩の御説法とかや
格当社の色樹に其あるの三本
社内の清水をつき収めまし

太平の松竹より常盤の名を
得しかし栄へゆる糀は牛し
茶よりも難しと申して
是まで松の字紀は和か来立
史より一日汗せしより一八名乗
ほどき成る木立よ山鳩阿まさされ
辰で様ふ為揃いも紙袋兄へて
山鳩を百度み様れや東紀の鈍
膝こ下申よもと当き日尽言の
田居及永の中よ丹頂の乗鶴一番

折りて鍾を擦ふ是寿ふるみれ
忘しなかん
丹頂れ寿鶴海み碎く氷の羽
十時享和二壬戌年十月毎日 六十九才 菊谷
夫目出度や親しよせ寿流くし
此書は孫明息子へ譲し
天保五甲午年正月吉日
九十二翁
蘭谷

追加

一 文化十三丙子年十二月十二日
善光寺様麻布御屋敷御廻り御越ニ而
御立寄ニ而 御目見被 仰付
御慈悲之 御手ニて上御血脈頂戴入国ニ付
人々百之入頂戴之御血脈国府
翌日右為御礼十七日ニ参上いたし候処
領大人壱枚被下
見ん上くしれいなしかるし 夫より富士

一　天保五甲午年正月廿九日俳

荒木隠居様老母濱衛人欣幸又と
御茅しもの家　御きこそ上総撰しぬ青網
収載を　作の花とか見合りしたれ花
太田様ハ出目収蔵の絵ヘ士形して山本総
当時ハこれ　みか発句相見へ浦さへ見まて
走日安ハ深き恵こや梅柳　冬年 学花
白川の名ホ比べ花井其ホ情の
人余り　桜の御枝まとこ虎の

一　立年ニあまして老名と書

秋さびも志らぬ詠や岩と松
月とりて深き情ひなと詩千代
草木もさよ一筆志らへや紙顔を
書しよ在の顔ハ月とりし和様
振しまう事乃北の東や社前
弁の花水や富士ハ亭跡を見の参り
月なりしま菜明れよ此鳥
雲近き峠と謝りや此鳥
風雅とりハ絵新紙や綴りまなぶ

一 第○年此誕生日を祝ふて
積む雪しの路より君や花卯の末
少年て百く不迫さや 附る
卯月七日 古 榮谷

一 天保○卯年卯月七日榮花[redacted]花
年丈ふれ誕生日を祝ゐへるを
賀し奉りて
牡丹ふと松とよし花の寿の王

一 稚句 作の祝ひ 参加の作 古 陵潤

第八
延享二乙丑年四月七日 武劍君
御城内河内殿おせ入
于時 天保五甲午年四月七日書く

一 同年九月十五日
白川
御存命を奉賀しつゝ
御寿時節松に露の寿
御寿命民を思ひ 見に 悦て
永く 御存命を祝ふ

霊前に詣て寿き御代
武者ぶりの能く揃ふたる寒哉
九十二歳 榮翁

一 若殿様御宮参りを賀し奉りて
万代と祝ふや三志免の七年目
末広き葉ぶり嬉しや花の梅
八十歳 蘭谷

一 和らかな柳ハ志かと根の平
清風
榮翁

一 天保六乙未年正月分 三首
ほんのりと明けゆく京や初日影
長閑さや一面揃ふ梅柳
西行と小町も詣る年の市
人日
御節りの春かんけしで若菜哉
書初
筆末を硯の海や花まつ人
筆初を進ミ出るや年男

新年

一 御年や唐紙待の老木指
新年や霞分けて隅田川
ゆく年や見世に松竹仙の葉
新年や草も志んれ四方に花
御年や見世かゑを神楽宝
長かきまし汁のよし年の梅ひも
御気かあ庵と待かなりて
三日代や喜田北菜へなとゝへ

梅咲や往来の人をよ見こし
春霞御花よりも雲路の友

一 天保七丙申年正月より四冊是春興
三巻
若水や鯨も若き宿艶
若草や松の下枝の下
若の市男それ御冊子よ申ぞ
春興
春の立や庵の夜に保の松
若や御まその花十のうも
書口出かしえん初や花悦

若草や尾りて花咲ことも
春めくを形て知らしてのりにけり
しらさや柳もちらて新緑なれ

同

八十五歳正月今日元旦書之

千はやふる神代ならし初日の出
枝ふりも能く枝そろし梅の花
蝶柳や千年の葉をまつらなすと
富士を見て霞のかかる路の春
若葉へ八の万代までも根の花

花まじも見ぬ生日の柳かな
あらたなる筑紫の嶋も雪解けり
暁の霞て若花の色かや春の空
春の日や扉も立る家にりて
春めくや伊勢初日ぞ若まつし
若草や柳のきよくもえての花

人日

小松めと力もゆかん若菜かな
みとり若て祝はる月の照る菜摘かな

新年や雪解香しき経おろし
新年や子のとふさ　新鶯
新年や木母寺まてハ舟もよし
新年や菜をつん来る孔雀やと
新年や王子のとをみて花見山

梅の使春日ハ
泰寿院様年来梅を御愛し
折々梅ハ法花経よみつゝ
花の御法のまま業をさとし

こゝ香りめでたく常も来りて
法花経ときくより是別稀
なる御長寿の百歳をま
祝して
めでたしや

自在天神　梅の花

天保八丁酉年
二月六日
九十二歳
蘭谷

淀河丈之丞　一声

川上(?)て川音しけり[illegible]
柴を煮て[illegible]

菜谷様御句

天保十三寅年
七月十二日逝去

一 [illegible]

門人

[illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

一

一

常にわすれぬ煙霧の那

新殿のわたりて消えかや出の戸

秋の庵にも末ならぬ冬の中山

松すか枕に露をまく[illegible]の中

雲に籠る家も[illegible]稲の[illegible]

菊と申も秋のぬ峰の山風

流しするや名の白の清き月の影

水行山やさかへ申しんむかふ月

明けきて未経の先や床のまま

一 萩さくや[illegible]にも捨ること
実のりいかにて掛し 小松原
手にも月夜しられ名ところ
袂てうくるを 瓢の 紅

一 河白植のなり渕 也たるの[illegible]
繕けてりんり雲 村雨

一 月さしてほしくこえ家の字
前も秋にはじめ 懐
弓も[illegible]の 紫の[illegible]

一